命の大切さを学ぶ教室
全国作文コンクール

第7回【優秀作品集】

警察庁 犯罪被害者支援室

【文部科学大臣賞】

「今を生きる」

（山梨県）
山梨県立都留高等学校　三年　山本（やまもと）　悠希（ゆうき）

先日、十六年前に起きた池田小事件で娘さんを亡くされた本郷由美子さんの講演を聞いた。本郷さんは、我が子を亡くすという私たちにとって想像をはるかに超えるだろう辛い思いをしながらも、その思いとともに精一杯生きていた。この講演会を通して、私の学校の生徒一人一人が「命の大切さ」について改めて考え直すきっかけとなった気がする。

私も数年前に、大切な人の命を失った。それはあまりにも突然で、私にとってとても衝撃的なことだった。都留市出身である私の伯母（山本美香）は戦場ジャーナリストとして、世界各国の内戦が起こる現場に出向き、女性や子どもなどの弱い立場に置かれている人を中心に取材し、戦下で暮らさなければならない人の声を代弁していた。しかし、中東シリアでの取材中、戦闘に巻き込まれ、命を失うという結果になってしまったのだった。私自身も、私の家族も誰もが皆、伯母が危険と隣り合わせで仕事をしていることは、充分承知しているはずだった。一方で、私の伯母だけは大丈夫だと、帰ってくるものだと、どこか安心していた。しかし、実際にこの受け入れ難い悲しい現実を目の当たりにしたとき、現実を受け止めるのに、相当な時間を要したのだった。

伯母の死を受けて、メディアは伯母が伝えたかったことについて連日大きく取り上げていた。私はそれを見る度、今まで知らなかった伯母の活動を知ることができ、その偉大さを更に感じることになった。その思いが大きくなるにつれ、伯母が見てきたもの、経験してきたことをもっと知りたい、もう一度話をしたいという思いも強くなっていった。だが、いくらその思いが強くなっても、一度失った命はもう二度と戻ってくることはないのだ。この出来事は私に、一つの生命は強く輝きを放ちながらも、一方ではもろくてはかないものであるという感慨を抱かせた。

本郷さんは、講演会の中で私たちに、「今、皆がここにいることが嬉しい。ありがたいことだ。」とおっしゃっていた。一つの命は、いくつもの数えきれないほどの命につながっている。当たり前のことだが、壮大で奇跡的なことなのだと思う。私が今、こうしてこの場にいて生きているということは、亡くなってしまった大好きな伯母を含む、たくさんの命が関わっているのだということを考えると、自然と「命を大切にしなければ」という気持ちが強くなってくる。

現在の日本では、いじめなどが原因で自殺に追いやられてしまう子どもや、殺人事件・交通事故などで失われてしまう命も少なくない。また、世界に目を向けて見ると、テロや内戦、その影響による飢餓状態が永らく続いている地域もある。罪のない人の命が奪われてしまうこの世の中を、少しずつ変えていかなければならない。私の生は、また別の一つの生につながっていく。本郷さんの講演をきっかけに、私自身も周りの人を大切にしながら、今をしっかり生きようと改めて心に誓った。